慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	藏書印殊に文庫印
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.3 (1922. 5) ,p.90(440)- 106(456)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220500-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

藏書印殊に文庫印

（一）藏書印

自分は目下或る編修に從事してをるものであるが、其の編修上、禁中の御湯殿上の日々記の原本を始として、公家武家社寺の記錄文書、其他種々の書籍を毎日手にして居る。其の手にする書籍中に種々の藏書印が押されてあるのに興味を覺え、それを昨年七月頃より暇毎に集め始めた。今これによつて得た知識により「藏書印」について少しく記述し、以て諸彥の叱正を仰ぎ度いのである。

凡そ書籍（寫本印本）に印章（印判）を押し、或は自分の姓名、又は花押等を記すことの目的は其の所有主を明かにするにあることは記す迄も無いが、所藏の書籍が增加するに從つて、藏書のみに限られて押す印章が自ら必要となる。（勿論中には他の印を藏書に共用するものもある。）これを自分は藏書印と云ひ度いのである。

次に自分が今日迄集めた藏書印は主として德川時代の物故、其時代の物につき記述するのである。

さて家康は天下を治むるに、文學奬勵の必要を感じ、人の知る如く、伏見に學校を興し、かの圓光寺の元佶を其の主宰となし、又彼の僧をして木活字十萬餘を刻せしめ、所謂「圓光寺活字」を作り、それを以て「孔子家語」「六韜」「三略」「貞觀政要」「東鑑」「周易」「七書」等を各開板せしめ、又其の晩年駿府に於て、金地院の崇傳、林道春等をして、銅活字を鑄造せしめ、「大藏一覽」「群書治要」等を開板せしめたが、これと同時に他方にては古書の蒐集をも奬勵して、慶長七年六月に江戸城內富士見の亭の傍に文庫を建て、有名な武州六浦庄金澤文庫の諸本を移さしめ、其他和漢の圖書を收儲し又元和二年十一月駿府書庫の書籍を三家に頒布し、我が舊記と稀世の書籍とは之を江戸文庫に收

藏せしめた。家康のこれ等の古書を蒐集收藏せしめたのは開板と散逸防止とにあつたのである。この前記駿河の書庫にあつた本即ち「駿府本」や江戸の文庫、後の紅葉山文庫の本即ち「紅葉山本」等は現に内閣文庫並に圖書寮の文庫の中に大部分收儲せられてあることは周知のことと思ふ。其の中には稀世のものが澤山ある。家康がかくの如くであつたから、爾後の將軍の中にも文學を好み、盛んに之を奬勵するものも出で、聖堂、昌平坂學問所等も建られ、講學と共に集書が盛んであつた。

上がかくの如くであつたから、下亦之に倣つて開板收儲の事が盛んになるのは當然のことである。

さてこの書籍の蒐集も最初は一般に保存、研究、出版のためであつたが、それが時代の下ると共に、それよりもなほ骨董品として之を蒐集し之を珍藏する樣になり、學者は申す迄もなく、各地の大名小名、はては町人に至る迄も、爭ふて珍稀の書籍を蒐集する樣になり、一つの珍書が書林に出づると、爭ひて之を求めんとして、忽にして、その價が百金千金となるのである。

然し中にはこれに反して水戸藩の如く、前田綱紀の如く、或は豊後佐伯の毛利高標の如く修史、又は研究、或は散逸を防止するために、即ち骨董品以外の目的のために蒐集した人も少くなかつたことは忘れてはならぬ。

さて書籍を骨董品として、蒐集する以上は其れに押す藏書印も、單に自分の所藏なることを明示するのみでは滿足することが出來ぬ樣になり、其の形狀即ち方形、長方形、圓形、小判形、勾玉形、瓢形等種々の形に、或は其の郭、即ち單郭、重郭、無郭、繪模樣等に工夫をめぐらし、或は又其の辭句、字體を種々撰擇し、且又印材、篆刻、彫刻等に技工をこらし、遂には其の使用する印肉(印油、印色)迄に、意を用ふる樣になつて來たのである。これがために種々雜多のものが、今日書籍の上に殘され、其の書籍の内容よりも寧ろ藏書印の如何によりて評價せられることもある。

さて自分が今日迄集めた結果によると德川時代に於ける藏書印の形狀は長方形のものが一番多

く、次は方形、小判形の順であるが、其の他種々異樣の形狀のものも少くない、今參考迄に異樣の例を二三あげて見ると、奥州磐城平の領主内藤義泰（左京亮）の印は分銅形で、幕府の醫官野間三竹の印は砲彈形で、水戸の彰考館の印は瓢形であり、又引馬文庫の分類印は勾玉形である。

次に郭即ち周圍の線は今の處では重、單、各々相下らぬが、單郭の方が結局多いものと思ふ。重郭も二線同一の太さのものと、外部の方が太きものとの二種がある、又無郭のものは極く少數である。其外線の代りに繪模樣を用ひた例は淡路守脇坂安元の印に、周圍に昇龍のあるものや、又下り藤のあるものなどがあり、これは何れも陰刻である。

次に字體は階、行、草、篆、隷、神代文字等であるが、今日の處では、眞文、篆文が多く、共に相半してゐる。

次に其の辭句であるが、これは種々雜多である。參考迄に二三例づゝかゝげることにする。即ち、

（一）姓をあらはしたるもの、

古賀氏。藏書章。（古賀精里）○は行をあらはす

平田。氏記。（平田篤胤）

柴氏家。藏圖書。（柴野栗山）

（二）名をあらはしたるもの、

君。美。（新井白石）

國端。圖書。（桂川甫周）

（三）姓名共にあらはしたるもの、

狩谷。望之。（狩谷掖齊）

源伴。信友。

（四）號或は字をあらはしたるもの、

掖齊。（狩谷望之）

正齊藏。（近藤守重）

天爵堂。圖書記。（新井白石）

羅。山。（林道春）

藤亭。（脇坂安元）

（五）號姓名をあらはしたるもの、

納菴大橋順。收藏圖書記。

左京藤原。貞幹藏書。

（六）職名並に姓名をあらはしたるもの、

吉田神社。社司中臣隆啓。朝臣之章。

弘前醫官澁。江氏藏書記。（澁江道純）

（七）住所、姓名等をあらはしたるもの、

湯島村狩。谷氏求古樓。圖書記。

江戸市野光。彥藏書記。（市野迷菴）

水戸青。山氏藏。（青山延子）

（八）文庫名をあらはしたるもの、

賜蘆文庫。（新見正路）

不忍文庫。（屋代弘賢）

（九）書院の名をあらはしたるもの、

丹鶴書院。（水野忠央）

この外特種の書籍にのみ押すものもある、即ち、狩谷望之。審定宋本。これは掖齊の宋版本に限りて押す印なることが知られる。

又變つたもの丶例をあげると、

身沒後代。我珍藏人。伴信友記。

述齊衡。新收記。（林述齊）

澁江氏珍玩。（澁江道純）

趨古齊。鑒賞之一。

嶋津氏。藏書。五車之一。

次に所藏書畫に共用する印の例をあげると、

佐伯侯毛利。高標字培松。藏書畫之印。

岡村豐彥。書畫之記。

又文字の代りに繪にてあらはしたるもの丶例は武田彥次郎（龍公美）の印で、これは圓の中に昇龍がある。又神代文字の例は賀茂眞淵の印であるが、何んと讀むかわからない。

さて以上は今日迄集めた藏書印によりて數例を摘出したに過ぎないが、此の外種々の異例が澤山に今後發見せられることと思つて居る。

要するに藏書印には自分の姓名、字、號、書堂名、又は文庫名等を撰び其の下に「藏書」、「藏書（之）章」、「圖書（之）印」、「圖書記」、「藏」、「文庫」等を附するが普通であることがわかる。

次に印材であるが、書籍に押されてある印即ち「印影」、「押形」では其の押した印即ち「印顆」が如何なるものであるかは一見した位ではわからぬが、印材には銅、石、木、竹等が普通に用ひられるのである。

なほ自分は先年一見したが水戸の彰考館の印

や、淺草文庫の印は各々銅印である。藏書印は石印よりも木印の方が多い樣に思ふ。

次に篆刻であるがこれには二種ある、即ち「陽文」「陰文（白文）」であるが、今日迄の處では陽文の方が大部分で、陰文は小數である。陰文の例を參考迄にあげて見ると、

八雲軒。（脇坂安元）
藤亭。（同上）
白川家。藏書。（白川神祇伯）
白石。（新井君美）

なほ中には陽文陰文を交互に用ひたるもの等もある、即ち

江雲渭樹。（林道春）

これは江と渭の二字が陰文で、雲と樹の二字が陽文でいづれも篆文である。

次に印肉であるが、大部分は朱肉で、次は黑肉で、綠色のもの、其の外異色のものも見た。この朱肉と云つても濃淡の差がある。又黑肉は書籍の界線或は文字を不鮮明にする恐れがあるためと思ふのが、僅少である、其の例をあげて見ると、

昌平坂。學問所。（昌平黌）
昌平坂。（同上）
中良文庫。（桂川甫粲）
求已文庫。
好問堂。珍藏記。（山崎美成）
仁和寺。（御室仁和寺）

其の外十數種見たが、よく寺院、僧侶の印に多い。

序でに記しておくが、昌平坂學問所の印には朱黑の二種があるが、これは恐らく最初書籍分類のために設けられたものと思ふが、今日存しているものを見ると區別が無くなつて居る。猶參考までに記しておくが、同學問所にては書籍上梓のために差出したる諸書を檢定して其の許可、禁止、改削を命ずるが、其の時には其の旨を附箋に記し、其の本に「學問所改」なる黑印を押して返へすのである。自分の手近にある「新宮城書藏」や「稻廼舍藏書」の朱印があり、丹鶴書院藏本、並に黑川藏本によつて校合した尊卑分脈には其の黑印が第一冊の表紙の右の肩に押してある。

猶印肉には綠色のものがあるが、前記加茂眞淵

の神代文字の印や、本居太平の印はこれである。この外紫色のものも見たことがある。

最後に記しておくが藏書印には其の人一代限りのものと、子孫代々用ふる家印と云ふべきものとの二種がある。

さて以上が自分の今日迄知得した徳川時代に於ける藏書印の大要である。この藏書印なるものは書籍の奥書、端書などと共に其の書籍の來歴を語るものであるから、吾等の如く日々書籍を手にするものには其の研究は必要のことであり、又興味のあるものである。

(二) 文庫印

自分が昨年來集めた藏書印中に『……文庫』と稱するものが、百種程ある。然し淺學寡聞のために、中には其れが何人の印であるか不明なものもあるが、書籍に親しみある人の參考迄に、其の印をかゝげ、其の寸法、文字、朱黑其他の點を記し猶其の印の使用主につき簡單なる説明を加へる。

金澤文庫 (重郭)

現存の文庫印中最古のものは恐らく金澤文庫の藏書印であらう。

金澤文庫は武州六浦庄金澤稱名寺内にあつたことは明であるが、然し惜しい事には其の創立の年度並に創立者が不明で異説が多い。訪書餘錄第一編に、

金澤文庫は正和五年北條顯時の建設せる所にして、其父實時の舊領たる武州金澤に在り、父の緣故により一寺を此地に創立して稱名寺と名け文庫を其寺内に設け、中略 當初顯時が六波羅探題中蒐集したる公卿の藏本を收めたりしが、其孫貞顯に至るまで三代繼續して孜々として和漢の群籍を集めたる爲め、大凡天下の書にして茲に藏せざるものなしと稱せらるゝに至れり。

とあり、金澤顯時の創建として居る、然し他の説には其の父實時の創立となつて居り、其の年代も建治元年前後であらうとの事である。

今日圖書寮に藏する舊金澤文庫本なる「卷子本春

秋經傳集解卷十四」の奥書に、

弘安元年九月廿二日以音博士俊隆眞人之本、書寫點校了、從五位下行左近衛將監平朝臣（顯時花押）

又同本「群書治要卷第二十九」の奥書に、

嘉元四年二月十八日以右大辨三位經雄卿本、書寫點校畢、此書祖父越州（實時）之時、被終一部之功之處、後年少々紛失之、仍書加之而已、從五位上行越後守平朝臣貞顯

と自署あるにより、金澤父子三世相續いて好學であつたことが知られ、この三人の御蔭で吾等は當時の書籍を手にすることが出來るのである。

而してこの文庫には和書並に宋版、元版の漢籍を多く藏して居り、前記貞顯の時が全盛時代であつたが、其子貞將の戰沒後より漸次衰頽し始めたものと思はる。釋義堂の空華集に、觀金澤文庫而作の詩があれば、貞治康曆年間頃迄はあり、其後は全く荒廢したものと思はる。

其後應永年間に管領上杉憲實により足利學校と共に再興せられ、やゝ舊觀を復し、文明年間には釋菜を行ひたることが太田持資の慕景集に見えて居る。其後慶長七年六月に家康この文庫を江戸城富士見亭の傍に移したのである。

さてこの文庫に藏せられた書籍には殆んど每冊、每卷に前記「金澤文庫」なる眞文の藏書印が押されて居る、時には一部の中數冊のみに押されてあるものも見える、又其の印の押し場所も卷首と卷末が普通であるが、時には卷の中程等に押したものもある。なほ後世に見る樣に表紙に押してあるものは未だ見た事がない。この印には黑朱の二種があつて、桂林漫錄には「佛書ニハ朱肉、儒書ニハ黑肉ヲ以テ印ヲオシタリ」とあるが、自分は朱印の方は一度見たのみであるから、これは暫くおいて、其黑印について、少しく記述したいと思ふ。

今日圖書寮に藏する文庫本は全部黑印であるが、其の黑印も各々異なると聞き、又先輩の編纂した「古芸餘香」にも同文庫本十六部の解說があり、それに其印が一一あげられ、且其の寸法が記載してあるがこれによると同文庫黑印には異種類

が五種程ある樣になつて居る、即ち其の寸法は縱が二寸四分五厘より二寸六分、横が五分五厘より六分五厘になつて居る。

この藏書印に限らず、印を計ることは仲々容易の事でない、印は其の肉の加減、用紙の質、捺手の力の强弱等によつて文字並に郭等が太くなり、或は細くなるものである、まして其印の掃除がわるいと肉がたまり、自ら其の文字、線が太くなることは吾等の日常經驗するところである。それ故これ等の諸點に注意することなく、たゞ其の寸法のみを計り以て異種ありとなすは輕卒である。自分は暇のないために寮藏のものは一部しか調べて見ないが、今日迄のところによると、確かに文庫印に二種あることだけは斷言する。それは太さの點に於ては左程の相違は見えぬが、其の文字を詳細に檢するにより筆法の異なる點を見るのである。

其の一は即ち文庫中最も古く、且つ最も貴重なるものとしてある群書治要や卷子本春秋經傳集解等に押されてあるもので自分の日用の曲尺では約横六分縱二寸五分である、これが同種の印の大きさのほゞ正確なものとしてよからう。

次に他のものは「王狀元集百家注東波詩集」等に押してあるもので、大いさは横六分五厘弱、縱二寸五分五厘弱である。

この兩種の外に今後異種のものが出るかも知らぬが、今日迄見たのはこれだけである。而してこの文庫印は金澤氏時代に出來たものか、或は又應永年間上杉憲實の再興せし以後か未だ不明であるが、同文庫の冊子本即ち宋版元版其他のものには金澤三氏の奥書等なく、たゞ印のみなることより考へで、上杉再興後に使用し始めたものではないかと思はれる。これは暫く疑問として諸彦の御教示を仰ぐ。

以上は金澤文庫並に同印につき大略を說明したに過ぎない。猶附記しておくが、同印は長方形で界線のある漢籍等には至極便利であるため、はた藏書印中古きものの一なるために、この形にならひ、又「…文庫」と稱するものが後世多數出來て來たのである。

轟文庫（單郭）

この印は足利學校藏の「論語義疏」の每卷首に足利學校の藏書印と共に押されてある。この轟文庫は何人のものであつたか知らぬが相當に古きもので、恐らく足利中葉過のものと思はれる。自分は寫眞で一見したのみであるから詳しく說明することは出來ぬ。

温故堂文庫（朱印、五分五厘（重郭）横、眞文、一寸四分五厘縱）

「退閑雜記」に、

寛政五年のころ、朝に願ひて、和學校所とりたつべき旨にて、地所を下し給ひける。この學校の名を予（松平定信）に乞ふことしきりなり。故に温古堂とつけよと、人をもて云やりたり。

とあり、即ち温故堂の名は、寛政五年閏十一月塙保己一（延享五、五生、文政五、三死）の學塾和學講談所が成つて後、樂翁公の名づけたことがわかる。なほ同印の外に「和學講談所」なる朱印がある、これは同文庫印と同形同字である。同所にて編纂した正續群書類從、塙史料は國の寶である。

樂亭文庫（朱、五分五厘强行、二寸（重郭））

これは松平定信（寶曆八、十二生、文政十二、五死）の印にして、定信は田安宗武の三子、幼名賢丸、字は貞卿、出でゝ奥州白川の城主松平定邦の嗣となる。老中になり幕政を釐革し、海防のため房總豆沿海を親しく巡視したこと等は顯著なことである。定信學を好み且つ和歌丹青の技に通じ、藏する書籍亦多く、其編集古十種は考古學史學に志す者の座右に備ふべきものである。文化九年致仕して樂翁と稱す。

定信の藏書印には右の外直徑一寸の圓の中に「白河」と眞文にて記したるものや、「白川文庫」（朱、眞、七分五厘、一寸一分）と記したるものがある。

賜蘆文庫（朱、五分五厘眞、一寸一分（重郭））

これは新見正路（寛永元、六沒）の印にして、正路は字を義卿、吉次郎と稱し、文政十二年大坂町奉行となり、令名あり、安治河口を浚渫し、其の鑿土を積み以て一大丘を爲し、時人これを天保山と呼ん

だ。正路學を好みて著述若干あり、又宋版以下の珍籍を多く集めて居つた。

松岡文庫 朱、五分五厘 眞、二寸五分餘（重郭）

松岡辰方の印、姓は丹治氏、通稱平治郎、後清助、字は子辨、號は雙松軒、梅軒、久留米の人（明和四生、天保十四、五沒）有職古實に精通し、之に關する著作多く、其子行義、孫明義相繼いで明治に至る。其の藏する處の書籍には寫本多く、これは今日全部圖書寮に藏せられ珍本も少くない。なほ有職故實に關する圖會、圖抄、圖考の版木の一部も藏して居る。この松岡本には「松岡文庫」なる印が各々押されてあるが、これには三種あり、一つは前記の寸法で金澤文庫印と字體形式寸法等略ぼ同一である。他は六分五厘餘 一寸五厘餘の長方形に眞字にて、又一寸五分 五分の長方形に篆字にてかけるものとである。猶外に「松岡家之藏」五分弱 一寸六分と眞字にて記せるものもある。これ等は何れも朱印である。

中良文庫 黑、五分五厘 眞、一寸四分（單郭）

桂川周粲（サン）の印にして、周粲は蘭醫桂川周三の子、名は中良、字は虞臣、又森島氏を稱せしことあり、桂林と號し、狂名は竹杖と云ふ。（文化五 十二沒）中良は日々著作飜譯を以て事となし、蠻語箋、桂林漫錄等の著述あり、又狂歌稗史を好み、田舍芝居、太平樂卷物等の戲著は人に知られて居る。

不忍文庫 朱、六分五厘 眞、一寸二分五厘（單郭）

屋代弘賢の印にして、弘賢は通稱太郎、名は詮虎又は詮賢後に弘賢、詮文と改む、輪池と號し、（寶曆八、生 天保三、正沒）國學者として名高く、歌書の兩道に達し、幕府に仕へ朝鮮國王への返翰等を書いたといふ、弘賢は書籍を愛し、文庫三所迄有し、其藏する處五萬餘卷に及べりと、當時私人にして、かく藏書を有せしものは小山田與清との兩人のみなりしといふ。其の門に集り敎を受け、法を傳ふるもの三千人と。輪池の號並に不忍の文庫名は其の住居の不忍池の附近にありしためである。弘賢の著述中古今要覽は有名なるもので、又文化九年に完成した寛政重脩諸家譜の編纂にも携はつた。なほ附け加

へておくが「不忍文庫記錄目錄」（寫本二卷）、「不忍文庫書籍目錄」（寫本八卷）がある。

根津文庫（朱、六分眞、一寸九分五厘（重郭））

森尹祥の印にして、尹祥は字を源流、通稱を傳右衛門と云ひ、幕府の祐筆を務めて居つた。其の住居の根津にありしためかく名づけたものか。寛政十年三月死す。

增島文庫（朱、七分眞、一寸五分五厘（單郭））

增島蘭園の印にして、蘭園は名を固、字を孟鞏、金之丞と稱し、蘭園は其號である。（明和六、生天保十、九、沒）昌平黌の儒者にして、其門に集る者多く、蘭園本草學に精通し、且繪事に耽けり、著述所讀易小言、學庸參辨等數十種を遺した。

山岡文庫（朱、七分五厘眞、一寸九分（重郭））

山岡俊明の印にして、俊明通稱左次左衛門、入道して明阿彌陀佛と呼ぶ、（正德二生安永九、十沒）道春の門に學び、中年より和歌を好み、我邦の記傳を講究し、幕府に仕ふ、著す所のもの十數種、中にも類聚名物考四百餘卷は人に知られるものである。

朽木文庫（朱、五分二厘眞、一寸七分餘（單郭））

江州高島郡朽木にて四千七百七十石を領せし旗本朽木氏の印にして、江戸小石川春日町に住し、文庫數棟を有し、多數の書籍を藏しておつた。「朽木家藏目錄」（寫本十卷）がある。

伴信友文庫（朱、六分眞、二寸五分（單郭））

信友は通稱鋭（オ）、州五郎、事負（コトヒ）と號す。若狹小濱の藩士、山岸氏より出でゝ伴氏を繼ぐ、本居太平の門に遊び、和漢の學に通じ、博覽强記にして、宣長の志をつぎ其遺缺を補ひ、著す處の書凡三百卷、輯錄する所百五十卷、校訂する所二百六十卷、中外經緯傳、神社私考を始めとして、かの史籍年表の如きは吾等の常に座右の友とすべきものである。信友の著述は國書刊行會の「伴信友全集」に集められてある。信友の藏書印はこの外に約八分四方の正方形に「伴氏所藏」とあるものや、約一寸五分の

底邊を有する三角形の如きものの中に、「源伴信友」とあるものや、又約九分九分五厘方形の中に白字にて「身沒後代。我珍藏人。伴信友記」と三行に記したるものや、又約六分五厘七分五厘の長方形に、左右に白字にて「コノフミヲカリテミムヒトアラムニハ（以上右側）ヨミハテ、トクカヘシタマヘヤ（以上左側）」とあり、中央の頭に紋ありて、其の下に陽字にて「若狹酒井家々人伴氏藏本」とあるもの等あり、何れも朱印である。（安永二、二生弘化三、十沒）

石原文庫

朱、七分隷、一寸八分、貨幣形

石原正明の印として、正明は尾州の人初名將聽、後に正明に改む、嘉左衛門と稱し、蓬堂と號す、初め本居宣長に、後に塙保己一の門に入り、其の講談所の塾頭にあげらる。有職に約通し、又和歌を善くし、其の詠草一萬首に達したと、著述に冠位通考、辛酉隨筆、癸亥隨筆、蓬堂集等があり、文政四年正月沒した。

西莊。文庫

朱、六分餘眞、一寸三分餘（重郭）

小津久足の印にして、久足は伊勢松坂の豪商で、本居宣長の門人である。雜學庵と號し、書畫刀劍等を好み、晩年には眞の雜學者となつた。久足には天保十年紀伊熊野より丹後天ノ橋立に至る迄の和文紀行あり、「濱木綿日記」寫本三卷といふ。

桑名文庫

朱、七分五厘眞、二寸一分餘（重郭）

桑名松平家の印である。文政六年白河城主松平定永（定信ノ子）桑名に移封せられ、明治維新に至つた。この外圓形の中に「桑名」とあるものもある。

阿波國文庫

朱、六分眞、一寸九分五厘（重郭）

阿波德島の城主松平阿波守（蜂須賀）家の印である。蜂須賀氏は清和源氏足利泰氏に出で、天正十三年秀吉の四國征伐の節功ありて阿波一國を與へられ、德島を居城とした。慶長五年關ヶ原の役に東軍に組みし、德川氏の信賴を受け、元和九年以來將軍の編諱を賜はるの恒例となつた。

岸藩。文庫

朱、一寸二分篆、一寸五分（單郭）

岸藩は和泉國岸和田藩のことを略したのであ

る。同地は寛永十七年岡部美濃守宣勝の居城となつて以來岡部氏累代相繼き明治維新に至つた、（三萬五千石）、この文庫印は岡部家のものであらふ。

花廼家文庫

朱、六分眞、一寸三分五厘（重郭）

信濃國須坂（スザカ）の藩主堀氏（二萬餘石）の印である。堀氏は明治に至り、本姓奥田氏に改めた。

この文庫名は多く「墨坂十。一代主。寫藏記」なる（朱、一寸五分篆、四方）朱印と共に押してある、墨坂十一代主とは新賢のことであらふ。

東井文庫

朱、七分眞、一寸九分餘（單郭）

曲直瀨玄朔の印である　玄朔は後に正紹と稱し、東井と號し、醫を以て著はれ、天正の初勅を奉じて父の稱道三を受く、同姓正慶の甥、正慶の子沒したるを以て養ひて嗣とした。正親町院天皇不豫の節獻藥して、其の功あり、因て法印に進み、號を延命院と賜ふ、後ち延壽と改む。又後陽成院天皇の不豫の節に獻灸して其功あり、因て金瓶を賜ふ。後將軍秀忠に從ひ江戸に赴き邸を城内に與へらる。玄朔好んで生徒を敎へ、又著す所醫方明鑑、天正記、續天正記等數十種あり。寛永八年十二月に沒した。

青蒙文庫

朱、六分五厘眞、二寸一分（重郭）

狩谷棭齋の印にして、棭齋本姓は高橋氏、通稱は津輕屋三右衛門、名は望之、字は卿雲、號は棭齋の外、蟫翁、六漢老人、家號に常閑書院、實事求是書屋等がある。

棭齋は和漢學に通じ、殊に律令の學をつとめ、吾邦の制度の隋唐の制度によれるにより、唐律、六典、通典等の諸書を精研し、溯りて漢學を修む。源順の和名類聚抄の考證十卷を作り、又度量權衡考を作り、本邦制度の源流を明かにした。又日本靈異記考證、法王帝說證註、皇國泉貨通考等の著多く後人を益すること甚大にして、古京遺文の如きは吾等の如く金石文に興味を有するものゝ必らず座右に備ふべきものである。なほ棭齋の藏書印には小判形（五分五厘餘、一寸二分）、長龜甲形（五分五厘、一寸）に各々篆字にて、「棭齋」と記したるものや、其外前記「湯島

村狩。谷氏求古樓。圖書記」朱、一寸四方篆、又は「狩谷望之。審定宋本」朱、四分五厘篆、八分等數種あり、何れも朱印である。（安永四生天保六、閏七沒）

鐵研文庫

朱、五分餘篆、一寸一分五厘（單郭）

鐵研は齋藤拙堂の別號にして、拙堂は名を正謙、字を有終、通稱を德藏と云ひ、致仕して拙翁と稱した。伊勢津藩の人藤堂家に仕へ、幕末有數の儒者で、弘化元年督學となり、文武の學政を總理し、一方に學則を定め、學徒を敎へ、又書籍を蒐集し文庫を建て、これを藏した。著す所伊勢國司記略、南山遺芳錄の外十數種がある。なほ拙堂にはこの外篆字にて「齋藤氏圖書記」六分九分と記した朱印等がある。（寛政九生慶應元七沒）

南畝文庫

朱方九分篆（單郭）

太田南畝の印、南畝は名を覃、字を子耕、別號を蜀山人、杏花園、櫻山人、石楠齋等と云ひ、通稱を直次郎と稱し、後に七左衛門と更む。幕府の小吏にして、學を好み文を善し、傍ら遊戲國歌を作る、其滑稽諧謔村老夫野嫗と雖も抱腹絶倒せざるものなく、今日にても蜀山人の名を知らぬものは無からう。一話一言、萬歲狂歌集等の戲作雜著頗る多い。なほ南畝には「太田氏藏書」朱、四分篆、一寸四分の印もある。文政六年四月沒す。

曲亭文庫

朱、五分隸、一寸九分（單郭）

瀧澤文庫

朱、三分五厘眞、一寸二分五厘（單郭）

瀧澤馬琴の印にして、馬琴は名を解、字を瑣吉、小名を倉藏、後に清左衛門と改め、晩年剃髮して篁民と稱し、曲亭馬琴と號し、又著作堂、簑笠漁隱、玄同陳人、魁蕾子等とも號した。有名な八犬傳の著作をなし、一世に名高く、其の著述する所二百五十種を下らぬ。馬琴其の嗣子興繼の病沒後、其の子の爲に藏書を賣り、以て武士の官を買ひ與へたといふ、又其の藏書の多きことが知られよう。（明和四生嘉永元、十一沒）

狂歌堂文庫

朱、六分五厘篆、七分（單郭）

北川眞顏の印で、眞顏は通稱を嘉兵衞といひ、町人にして、狂歌師として名高く、戀川好町、四方垣、俳諧歌場の號號がある。蜀山人に就いて斯道を究め、初め號を鹿津部眞顏（マカヲ）といひ、寛政八年五月蜀山人より四方の姓と共に四方側の判者の免許を受け、狂歌堂眞顏と改む、文政十一年五月二條家より宗匠の號を免許せられた。されど晩年甚だ零落を極めたとのことである。文政十二年六月沒した。

虎五郎文庫

朱、三分餘　眞、一寸　（單郭）

松澤老泉の經籍答問に、

西國邊の大商人と云傳、寛政の初年右藏書印を押たる本所へ下る、

とある。同文庫印の押してある本は金澤文庫本を始め宋元版等相當來歷のある本である、これより察するに町人であつたが、餘程の藏書家であつたものと見える。

なほ同書には「妙解文庫」（東海寺塔中妙解庵）並に「本所宰府文庫」（龜井戸天神の社人）の兩文庫印を載せて居る。

仁和寺文庫

陰、眞　陽、朱　篆　（單郭）

仁和寺は山城國葛野郡花園村にあり、世に御室御所と呼ぶ。眞言宗の大本山で、光孝天皇の勅願によつて仁和二年八月工を起し、未だ成らずして崩御せられたので、次帝宇多天皇其の遺志を繼ぎ、同四年八月落成し供養式あり、大內山仁和寺と勅號を賜ふ。天皇法皇となり、延喜元年十二月其南に一宇を造營し、此に遷御せられたので、御室と呼ぶのである。なほ法皇を以て當寺の開祖となし、爾來累世親王相承け御室門跡と稱し諸門跡中の冠である。小松宮嘉彰親王（純仁法親王）は維新前當寺の御門跡であつた、又同寺の藏書印には額形の中に「仁和寺」と眞字にて記した（二寸六分　三寸）朱黑兩印がある。

加持井御文庫

朱、三分五厘餘　眞、一四分五厘　（單郭）

加持井は梶井圓融院のことで、京都今出川口下ル東側にあり、又圓融院門跡、梨本門跡とも云ふ、宮門跡であつた爲に普通に梶井宮といふ。今の

梨本宮の先宮は當院の御門跡であつた。

伯家。文庫 朱、七分五厘 篆、一寸六分 （單郭）

伯家は神祇伯即ち白川家のことである。同家は華山源氏にして、花山院天皇の皇子清仁親王より出で、其の王子延信後一條院天皇の萬壽二年に源姓を賜はり、神祇伯となる。康資顯康の二世を經、顯廣又神祇伯となるに及んで其の子孫世々神祇伯に任ぜられ、同時に皆王氏に復し、……王と云ふ。後世白川氏と稱し、明治に至り伯爵となる。同家には神祇に關する記錄文書多數傳へて居つたが、昨冬これを宮內省に獻じ、今圖書寮に保管せられて居る。前記の印の形狀は長方形の頭部の左が少しく缺けたる如きものである。其他直徑約二寸二分五厘位の牡瓦の端形に篆字にて中央に「白川家」、其の左右に「藏書」の二字を分けて記したものもあり、又篆字にて「神祇伯」と方一寸五分のもの、「白川家藏書」と八分五厘一寸五分五厘のもの等あり、後の二者は何れも白字の朱印である。

鶴園文庫 朱、四分 草、一寸七分 （無郭）

旗本蜂屋光世の印にして、光世は文學を好み、歌を善くし、小山田與清について學び、大江戸倭歌集六卷、江戸和歌集二卷等を著はす。鶴を愛したとの事であるから、其の文庫の印もこれによつたものかとも思はれる。其の夫人久子は明治初年に於ける有數の歌人にして、歌道を以て宮中に奉仕された。

磯部文庫 朱、七分五厘 篆、一寸五分五厘 （單郭）

磯部最信の印、最信田安家に仕ふ、始め經史を修め、國學を蔑視す、後國典を攻究し、專ら神道教を敷き以て國體を講明した。維新後相川縣權參事となり九年罷む。明治二十三年大成教管長となり、三十一年一月に沒した。

淺草文庫 朱、六分五厘 眞、二寸四分 （重郭）

明治七年七月三十日に淺草舊米廩八番掘五千八百坪の地に淺草文庫を置き、書籍館（明治五年四月に昌平黌を書籍館

（と改む）の圖書を移藏し、同八年十月十七日同文庫を開放し、衆人の就て圖籍繙閲を許された、同十四年十月を以て上野博物館に移り、文庫の名は消滅せしも、なほ閲覧を許し、同十九年一月十九日閲覧を廢止した。此文庫收藏の書籍は明治十一年發行の目錄によれば和漢書凡そ一萬七千餘部である。印は長方形重郭にして、其の文字は三條實美公の筆蹟であるとのことである。

序でに參考迄記しておくが、德川の始に幕醫二代板坂卜齋（如春）の文庫名も亦淺草文庫といひ、其の印は象の腹部に篆字にて如春と記してある。又堀田加賀守正盛の邸内にあつた文庫も、世に淺草文庫と稱したとのことが武江年表（明暦元年條）に見えて居る。又幕府の御家人德川實紀の編纂に與つた木村重助の創設した私立文庫も亦淺草文庫と稱し、長方形の單郭の藏書印がある。又蘭學者大槻如雷の淺草に設けた文庫も亦淺草文庫といふ、其の印は舊米廩の淺草文庫の瓦當より象りたるものであるとのことである。

太政官文庫

（朱、篆、方一寸五分　單郭）

太政官は王政復古により明治元年正月太政官代を設けしに始まり、明治十八年十二月官制改革によりて内閣と稱せられ其の名稱は廢止せられた。同文庫は今日の内閣文庫の前身である。

さて以上掲げ説明を附したものは半年間に集めた文庫印の一部に過ぎないが、若し讀者の參考となるならば自分の喜ぶところである。

大正十一年三月廿一日

武田勝藏